

題字 大島文雄先生

人文



賑わい広場グランドプラザ（富山市総曲輪）

若者にとっての とやまの「まち」

准教授 大西宏治

今年の総会でご講演いただきます。

詳細は 8 ページを
ご覧ください。



富山まちなか研究室MAG.net

富山大学人文学部同窓会

〒930-855 富山市五福3190

電話：(076) 445-6143

FAX：(076) 445-6141

E-mail：
alumni@hmt.u-toyama.ac.jp

熱い思い、再び 河合 隆(21回国文)

外国語に取り組む 保阪靖人(30回独文)

絵の力 島村郁乃(14回独文)

研究室から／人文地理学

蓮町馬場公園での思い 松岡 茂(12回史学)

研究室から／国際関係論

富山から長野へ 伊東洋輔(61回東洋史)

卒業祝賀会報告、新刊案内等

富山大学アーカイヴズについて

人文学部教授 立川健治

総会、人文の集い報告

総会、第4回人文の集い開催案内

熱い思い、再び

富山大学同窓会連合会会長

河合 隆 (21回国文)



摩擦を回避する知恵であるといわれてきた。確かに皆が言いたい放題では收拾がつかないだろう。

人間というのは、いつも混沌とした時代を生きる定めにあるらしい。歴史上、理想の時代をすんなり生きた人間などただの一人もいなかったに違いない。今、二つの思いにとらわれている。一つは社会の表層と底流を流れる本音の世界がますます乖離していくのではないかと、という危惧である。もう一つは、IT社会の到来がパンドラの函を開け放ったのではないかと、という恐れである。この二つは表裏一体となつて渦巻き、精神の貧困、荒廃へと突き進んでいるように見えて仕方がない。

本音と建前の使い分けは日本人のお家芸らしい。相手の気持ちを慮る美德であり、不必要な

って大人の世界というのは、甚だ寂しい。

孔子は平常の勇氣は戦場の勇氣に勝ると教えている。利害や損得を乗り越え、是々非々を明快に論ずる社会へ脱皮しなくてはならない。これは、私たちの責務であり、富山大学の学生たちが世界で活躍するために不可欠な価値であらう。

IT社会はさまざまな恩恵をもたらした。全世界が瞬時に繋がり、膨大な情報を共有できる。夢のような世界が実現した。

一方で、ネットの中では誰もが主役になり得る。個々の主観に基づいた情報が際限なく発信される。秩序ある価値観は崩れ、「人気」が最も重要な要因になった。いかに自分が目立つかに腐心する世界である。当然、不都合な部分は削除し、あたかも自分、あるいはその商品がいかに突出した存在であるかを強調することになる。

未熟な若者たちは、響聲を買うような行動をユーチューブに流して得意になっている。このような若者はいつの時代にも存在したと思うが、ネットはこれまでタガをはめられていた層に火をつけることになった。陰

湿ないじめもネットを介して広がっているようだ。

IT社会の進捗は驕り、憎しみ、悲哀、貪欲といった人間の負の本性をパンドラの函から一気に解き放つただけでなく、社会への不満、ひずみを増幅させている。

結局、建前と本音、IT社会の課題は国民の知的レベルの問題にいきつくのだろう。安易な流行や人気に左右されるのは、今の社会が「衆愚の時代」に入

ったからかもしれない。政治さえファッション化し、過去二回、ムード選挙が繰り広げられた。一回目は、新自由主義を標榜する小泉構造改革選挙。郵政改革こそ一丁目一番地の最重要課題という旗印のもと劇場型選挙が行われた。二回目は、民主党の政権交代選挙。「コンクリートから人へ」というスローガンは、時代が変わるとい

う期待を持たせたが、実際は素人集団という印象を与え、国民の信頼を損なつた。

私たちは、安易な風潮に流されず、頭脳と心を鍛え続けることが民主主義の原点であることを学んだ。

人文学部の基本的なテーマは、

歴史にしても文学にしても「人間」そのもののへの関心であり、洞察であろう。理工系や他の学部人たちは、さまざまな格闘とともに確かな手応えを得ることができる。

私たち人文系は何ができるのか。文学を含む芸術が、人間の心を浄化する訳ではない。今だに孔子や釈尊の教えが心に響くのは、人間というものが紀元前からさほど変わっていないことを物語っている。

私たちにできるのはこの混沌とした時代と向き合い、人間はどうあるべきなのか、確信は持てなくても、それぞれが思う人間社会の理想を問い続けることしかないように思われる。

インド独立の父であるガンジーは「理想に近づこうと努力すればするほど、理想は遠ざかっていくものだ。しかし、理想の実現よりも、はるかに価値あることは、熱い思いを持つて前へ進み続けることである」といういい歳をして今更という恥ずかしさもあるが、今一度、学生時代の熱い思いを再び取り戻し、地域や富山大学に貢献できるように努めたいと願っている。

(高岡市在住)

外国語に取り組む

日本大学文理学部教授

保 阪 靖 人 (30回独文)



二〇一五年三月の時点で、富山大学を卒業して三十三年になります。人文学部語学文学科ドイツ語・ドイツ文学コースが設置されたのは一九七七年ということなので、私は新人文学部の二年目に入学したことになります。今では名称もカリキュラムも変わり、「ヨーロッパ言語文化コース」の中の「ドイツ言語文化研究分野」になっているようです。昨年の『人文No.36』で宮内先生が書かれている紹介文を読むと、昔と同じように和気あいあいと教室が運営されているようです。語学の教育はやはり少人数でされるべきであり、それによってこそ、考察する基盤が形成されるからです。

新聞でもネットでも、「いつま

でも若い」とか「痩せる」などの美容・ダイエット系、「英語が話せるようになる」などの語学系、あるいは「勉強ができるようになる」という学力系、「お金が貯まる」などの金融系の広告が目につきます。目につくといふのは、それが「なかなか成功しない」からでしょう。それでも外国語を読めるようになったら、話せるようになったらという方々は一定数いらっしゃるようです。この場をお借りして、ドイツ語技能検定試験（独検）のことを少し書いてみたいと思います。独検は「公益財団法人ドイツ語学文学振興会」が主催しています。一級、準一級、二級、三級、四級、五級があり、春と秋に行われています。北陸三県では、昨年の春は富山大学、秋は金沢大学が会場でした。出願者総数ですが、二〇一四年は一万四四三〇名（併願者もいら

っしゃるので、もう少し実数は少ないと思います）です。これは実用フランス語技能検定試験が二万七五四七名、中国語検定が二万六五七九名であることを考えると、少ないかもしれません。文部科学省の統計

(http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2015/04/09/1323948_03_2.pdf)によれば、高校で中国語を教えている学校が五一七校、フランス語を教えている学校が二二三校あるのに対して、ドイツ語を教えている学校は一〇七校しかないことや、フランス語と中国語は会場校以外での団体受験も可能であるため、受験者を容易に増やせることを考慮に入れると、ドイツ語を勉強している割合は決して小さくありません。

独検では、上位の合格者に賞状をお渡しするだけではなく、最年少合格や、最年長合格の方々にも賞状並びに賞品を渡す会を例年開催しています。二〇一四年の最年少は、二〇〇二年から二〇〇五年生まれ、つまり、小学生から中学生にかけての方々に、最年長合格は一九二八年生まれの方でした。勉強のモチベーションを保ち続けることは大

変なものだと頭が下がります。外国語を学ぶコツは「あきらめないこと」であることは、外国語を職業にしている者には常識ではありますが、なかなかそのようにはできないものです。

二〇〇

四年にドイツ人の友人の五十歳の誕生日パーティーがイタリアのトスカーナ州のある田舎町であり、家族で行きました。その時のトスカーナの空気の気持ちよさと風景が非常に印象に残りました。掲載した写真が少しでもその雰囲気伝えてくれたらと思います。その体験からイタリア語の勉強をずっと考えていたのですが、富山大学在籍中にギリシア語、ラテン語のひどい生徒だった私が勉強するには生半可な態勢ではできないと考え、満を持して二〇一〇年から始めることにしました。六十の手習いならぬ五十の手習いですが、五年になります。始めた当初は、ラジオ講座、テ



レビ講座、学校に通うなどあらゆる手段を使いました。インターネットもありますし（NHKラジオ講座も一週間前の放送から聞き放題）、今はいい時代になったと思っています。昨年一週間ほどイタリアに行きましたが、言葉ではそれほど苦労せずに済みました。

よく語学を勉強するのは異文化理解の重要な一歩だと世間では言いますが、イタリア語を勉強して本当にそう思いました。地域文化の違い、男女の役割分担の違い（イタリアのマンマの伝統）など、ドイツとはかなり異なります。イタリア語の検定試験では聞き取りで銀行強盗の様子を描写してどれかを当てさせるという問題がありました。独検ではこのような問題はまず出ません。またドイツでは大戦の反省から歴史教育がかなりきちんとしていますが、イタリアでは美術（史）教育にかなりエネルギーを割いている印象があります。これから私の外国語学習がどこに向かうのかは分かりませんが、私の本職であるドイツ語を含めてこつこつと続けていくつもりです。

（東京都在住）

絵の力

島村郁 乃(14回独文)



一念発起して、東京銀座のギ

ャラリーで年一回個展を開催し

て以来、今年で八回目を迎える

す。いつの間にかです。最初は

何だか半信半疑だった同期の連

中も、今はニコニコととっても

“いい顔”で見て行ってくれ

ます。リピーターも増え、第一

回目には、どうなることかと内



作品：〈スウィング・オン・ザ・ムーン〉



作品：〈マイ・ファニー・ヴァレンタイン〉

心冷や汗ものでした。が、昨年などは、どういう訳か大盛況となり、続ける事がどんなに大切な事かを知りました。その大変さを越えて行く事、小を積んで大をなす“事を、たゆまず続けられ、少しずつ何かが出来てゆく事を熟知した次第です。

絵というのは、作者の気持ち

がそのまま伝わるものであり、

見る側にとっては、日常に無い

別の次元に浸れることが出来、

感覚は無限に広がって行き、想

像力を無限に広げて行く事がで

き、そういったことで、精神の

豊かさが増すなり、深まったり

するものであらうと思います。絵の力というのはそういうものでしょう。

ある意味で、絵は、不完全なものがいいのであって、白紙をふさぐのは、最後は、“心”であろうと思います。結局描く人の心、見る人の心にかかっているわけです。

私は、見て下さるできるだけ多くの人に、そういった“心”、元気とか希望とかを感じてもらえるような絵を、“心”を込めて一枚一枚描いて行ければと思っています。

好きなことを、好きなようにやっているだけです。が、年令は何ら関係ありませんし、今後もし好きなことを好きなように“肅々”とやっていくだろうと思っています。(富山市在住)

研究室

から

人文地理学

社会文化コース准教授

大西 宏 治

卒業生のみならず、いかがお過ごしでしょうか。人文地理学教育研究分野は、二〇〇五年の学部再編に伴い、社会文化コースを構成する一つの教育研究分野になりました。通称は人文地理学研究室や「ジンチ」のまま変わっていません。



現在の研究

室は比較的大

所帯となつて

います。学生

数は大学院生

が一名、四年

生が十一名、

三年生が九名

二年生が十四

名の総勢三十

五名となりま

した。最近で

はまちづくり

や地域活性化

などに興味を

持つ学生が多

いようです。毎年二月の卒業発表会と予餞会は相変わらず県内の温泉地に一泊する形で継続し、多くはありますが、卒業生も参加してくれています。学生たちにとっては夜中まで社会に出た先輩たちと語り合うことのできる貴重な機会になっています。ご都合の許す範囲で発表会や予餞会にご参加いただき、学生たちに刺激を与えていただけると幸いです。

することにしました。ぜひご覧ください。

最近の大きな出来事といえば、二〇一三年の立山町インターカレッジコンペティションでのアイデア賞受賞です。毎年二年生がこのコンペティションに挑戦し、二〇一三年には富山地方鉄道立山線の車内に沿線の写真や児童の絵画を展示する「動く美術館列車」を提案しました。これがアイデア賞に選ばれ、現在では「立山あーとれいん」として実施されています。

蓮町馬場公園での思い

松岡 茂(12回史学)

昨年五月上旬、町内のウォーキング仲間と富山駅北側の環水公園から蓮町の馬場公園(蓮町公園)まで、富山運河沿いにウォーキングをした。快晴のこの日、初夏の運河沿いは新緑と運河から時折吹く爽やかな風がとても気持ち良く、途中、中島閘門では遊覧船が、開閉する閘門を通過するところを見ることもできとても幸運だった。およそ二時間後、馬場公園に着き、皆で持参した昼食をとり、その後公園内を散策した。実は、この公園内を丁寧に散策するのはこの日が初めてであった。そして、かつての日を思い出し、心臓が高鳴るのを抑えることが出来なかった。私はここで学んだ五十年前を思い出していた。



この馬場公園は、年配の富山大学卒業生は皆知っていることであるが、旧制富山高等学校(七年度)の跡地である。現在の富山大学は、一九四九(昭和二十四)年に国立大学としてこの富山高高等学校を引き継いで開設された。この富山高高等学校は、富山市東岩瀬で廻船問屋を営んでいた素封家の馬場はるが一九二三(大正十二)年五月に寄付した基金一〇〇万円、同年七月三十四万円の追加基金を基に設立された。馬場はるはその後もヘルン文庫購入費一万五千円をはじめ多くの寄付金は総額一六一万五千円に上る。

私是一九六〇(昭和三十一年)年に富山大学に入学したのであるが、その時の文理学部はこの蓮町の富山高高等学校の旧校舎であった。現在の富山市五福のキャンパスに移ったのは一九六二(昭和三十一年)年の夏で、私はそれまでここで二年半学んだのである。こうしてここに立つと、あの懐かしい木造校舎と多くの思い出が脳裏をよぎるのであった。旧校舎の講堂は二十九番教室として使用され、多くの名教授の講義を思い出した。前庭の芝生では仲間と輪になって様々なことを議論し合った。また、西側の校舎では、時々運河沿いの化学工場から酢酸の臭いが漂ってきたことなどが懐かしく思い出されるのである。そして、それぞれの場所はどのあたりであったろうか、と思いをめぐらしたのであった。公園内には「馬場はるの胸像」をはじめ「ヘルン文庫跡」など幾つもの碑がありとても感慨深いものであった。同時に富山大学と人文学部の益々の発展を祈るのであった。

(立山町在住)



研究室から

国際関係論

社会文化コース准教授

林 夏生

激動の現代国際情勢や溢れる情報の渦中に身を置きながら、国際関係の歴史をふまえ、現状を伝える各種報道を冷静に読み解いて、責任と能力と自信をもって世界のどこでも自ら道を歩んでいけるそんな人材の養成が、国際関係論分野における教育の目標です。

そのため私たちは、入門レベルの1年生から「ニュース・ウォッチ」という課題に毎週とり組ませていきます。これは、1週間のニュースの中から関心のある事象を選び紹介するのみならず、新聞記事の中から「専門家の見解」も見つけ書き出した上で、自分の意見を述べる、というトレーニング。ニュースの概要だけでなく専門家の見解は紙媒体の新聞を丹念に読み込まないと見えてきません。これを毎週続けることで、学生の「ニュースを読む目」は格段の進化を遂げます。

また2年生に課す「インタビュー・レポート」では、「今この人に会って直接話を聞いてみたい！」



というインタビュー対象を決め、学生が手紙を書いて面談の約束を取り付け、インタビューを実施して成果をレポートにまとめる、という一連の訓練を実践させます。すでに、外務省の現役外交官から他国の駐日大使、大手新聞社の論説委員、さらには貿易・旅行・出版といった各業界を代表する企業の方々まで、指導している教員が驚くほど日本全国の多種多様な立場の方々が、知的好奇心に燃える本学学生の熱意をくんで対応してくださいました。

さらに私たちは、毎年9月に韓国ソウルにある国民大を訪問する研修を実施しているほか、学生の海外留学等も積極的に奨励しています。アジア近隣諸国との関係が難しい局面にあればあるほど、当たり前のように日本人・韓国人・中国人が同じ教室に集い、議論や会食をともにしながら意見交換ができる環境の大切さは、これからも増していくものと思われまふ。こうして、時事情勢分析能力のみならず「視野の広さ」や「度胸」にも磨きをかけた学生たちの多くが、就職活動で夢を叶えるのみならず、就職後も国内外でその能力を存分に発揮してくれている姿は、現役の学生や教員にとっても、大いなる励みとなっています。

富山から長野へ

—大学生から社会人になって—

伊 東 洋 輔(61回東洋史)



きましたが、卒業後すぐの時期に寄稿者となるのは珍しい、ということですので、これから社会に出る現役学生の皆さんに参考となるような話をしたいと思っています。

富山大学の東洋史を卒業し、現在は信州大学附属図書館医学部図書館に勤めています。学生と社会人という身分の違いはありますが、通算で六年間大学という環境にいながら、この二年間は学部の違い、地域の違いを体験しつつ密度の濃い時間を過ごすことが出来ました。

この春、とうとう北陸新幹線が開通し、近くて遠かった富山に多少行きやすくなりました。富山には学生の頃から付き合いを続けていた方々も、働き出したから新たに交流を持つようになつた方々もたくさんいらっしゃるの、今後どうぞよろしくお願ひしく思っております。さて、せっかく人文学部の同窓会報へ寄稿する機会をいただきました。

務系とIT技術系の資格をいくつか取得しましたが、歴史が直接関係していないそれらの勉強をするときでも、やはり大学で勉強したという経験はしっかりと生きていました。スポーツの経験がある人は、違う競技でもすぐにある程度できるようになるのと似ているかもしれません。「社会に出て役に立たないから」といつて大学の勉強をおろそかにするのは、非常に勿体ないことです。「役に立たない」なんてことは決してありませんし、何より社会に出てしまえば勉強したくともその環境を作るのはとても難しいですから、存分に勉強しておくに越したことはありません。

就職活動をする上で、面接で「今勉強していることが役に立つのか?」という質問をされることがあります。当然、面接官は我々が真摯に学問に取り組んできたかどうかをはかるためにこのような質問をするわけです。これまでの二年間を振り返ってみれば、私が富山大学で学んだこと、取り組んだことは間違いなく役に立っているといえます。司書という職務上、漢文の読み方や辞書の引き方を教えるなど、東洋史で学んだことが直接役立つ場面もあります。しかし、何より日々発生する仕事上の課題の解決や、社会人として新しいことを勉強する場合には大学でどんな勉強をしていたのかということが大きく能率を左右します。仕事以外では現在までに財務系とIT技術系の資格をいくつか取得しましたが、歴史が直接関係していないそれらの勉強をするときでも、やはり大学で勉強したという経験はしっかりと生きていました。スポーツの経験がある人は、違う競技でもすぐにある程度できるようになるのと似ているかもしれません。「社会に出て役に立たないから」といつて大学の勉強をおろそかにするのは、非常に勿体ないことです。「役に立たない」なんてことは決してありませんし、何より社会に出てしまえば勉強したくともその環境を作るのはとても難しいですから、存分に勉強しておくに越したことはありません。

さて、最後になりましたが、風の便りでは富山大学やお世話になった先生方、同窓の皆さんの活躍は長野まで届いております。せっかく富山と長野を結ぶ縁が出来ていますので、今後も連携・交流等、様々な形で富山大学と関わりたいと思いますので、どうぞ今後ともよろしくお願ひいたします。(松本市在住)

卒業祝賀会

華やかに開催



平成二十六年度人文学部卒業祝賀会が、去る三月二十七日ホテルグランテラス富山で開催されました。

毎年卒業祝賀会では二名の新理事を決めており、当日、卒業生の中から米屋保雄さん(63回言語学)、瀬戸もえぎさん(63回日本文学)のお二人が理事に推挙されました。

平成二十六年度
第二回理事会

平成二十七年一月三十日

午後の人文学部卒業証書授与式に引きつづき、毎年同窓会主催で開かれるものです。

大工原学部長の乾杯ご発声の後、卒業生たちは思い思いに歓談し、友人や先生方との別れを惜しんでいました。

平成二十六年度総会では、二十七年からは総会時期を早め、詳細は理事会で詰めることを議決しました。これをうけて、二十七年事業計画等について検討し、八頁にご案内の通り決定いたしました。

新刊案内
人文学部縁の方々の新刊を紹介します。

はるかにてらせ
栗林佐知(36回文化人類)著
未知谷 2014年11月刊

日韓漢文訓読研究
藤本幸夫(名誉教授)編
勉誠出版 2014年11月刊

読まれなかった〈明治〉新しい文学史へ
日本文学協会近代部会編 金子幸代(名誉教授)他執筆 双文社出版
2014年11月刊

アメリカ映画に見る黒人ステレオタイプ
赤尾千波(教授)著 梧桐書院 2015年4月刊

富山大学アーカイヴズについて

人文学部教授 立川 健治
(富山大学アーカイヴズ設置準備室担当)



アーカイヴズ設置準備室

高岡三キャンパスの学生を対象に毎年度開講しています。この授業の目的はつぎのようなものです。

明治期以降の全国、また富山県における高等、中等教育機関設置に向けての動きをふまえながら、旧富山大学の各前身校、戦後の新制富山大、また富山医科大学、高岡短期大学、そして三大学の統合による新富山大学設置から現在に至るまでの富山大学の歩み(歴史、教育、研究、社会貢献等)、そしてそれを受けての各学部の歩み(歴史、教育、研究、社会貢献等)を知ることを通して、富山大学生として学ぶ喜びと誇りを共有し、社会的使命感をもつ。

このような自校学は多くの大学でアーカイヴズの職掌の一つとして実施されています。

◆富山大学展の開催

富山大学にそのアーカイヴズを設置することを旨として、二〇一〇年以来、主に以下のような予備的な作業を行ってきました。

◆「富山大学」の開講

二〇一〇年度から、五福、杉谷

第一回(二〇二二年四～五月)
第二回(二〇二三年三～五月)
第三回(二〇二四年三～五月)
*今年の十月に県内三大学が統合して新たな富山大学が発

足したのを記念した第四回の大学展を開催予定です。

◆歴史資料及法人文書の調査・収集等

*この活動の一環として、「人文」第三十六号で紹介しましたように、昨年五月、旧制富山高校からの資料の寄贈を受けて、その譲渡式を行いました。

◆予備的作業、資料の保管・展示にあたる部屋の開設

二〇一三年十月開設(共通教育棟E棟一階、資料整理室)
*この部屋に所蔵している資料は、原則として、月曜から木曜の十時から十六時までの間、閲覧していただけます。



1949(昭和24)年「富山大学設置に関する調書 其の一、其の二」

次回から旧制富山高校、文学部、人文学部の歩みに関することを紹介していく予定にしております。

平成二十六年年度 富山大学人文学部同窓会総会

平成二十六年十一月一日
ボルファートとやま

昨年度は遠藤学長も出席され、ご挨拶いただきました。



遠藤学長

平成二十五年度
業務報告
決算報告
が承認され、続いて二十六年度事業

について中間報告と今後の予定が承認されました。

次に役員人事の協議に入り、新副会長に山本孝一氏(19回独文)が選出されました。新任理事に巻口宗一郎氏(62回日本文学)、吉田文弥氏(62回英米言語文化)など、その他の役員も原案通り承認されました。

更に米原会長から平成二十七年以降の総会時期について六～七月としたいという提案がありました。提案は承認され細部は理事会で詰めることが決定されました。詳しくは八頁をご覧ください。

総会後、人文学部教授呉羽長先生によるご講演「源氏物語」

の終焉と紫式部」を興味深く聞かせていただきました。

その後行われた懇親会では、呉羽先生、大工原学部長を交え同窓生が親睦を深めました。

第三回 人文の集い

平成二十六年十月十八日
人文学部第二講義室

富山大学名誉教授の三寶政美先生より「往事茫々(中文専攻)誕生秘話をめぐって」と題するご講演を拝聴しました。

富山大学人文学部の歴史の一端に触れ、参加者一同、懐かしい学生時代に思いを馳せて、大学への気持ちを新たにしました。

当日は、中国文学専攻の同窓生を中心に、大学関係者、旧制富山高校同窓生の方も含め数十名が参加され、三寶先生ご夫妻を囲んで和やかな昼食懇談会も開かれました。



三寶先生

また富山大学ホームカミングデーも同日、開催されました。

平成27年度人文学部 総会のご案内

晴天に恵まれ、吹き渡る風にもはや夏の兆しを感じられるこの頃ですが、皆様にはお変わりなく、ご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて本年度の総会を、下記の要領で開催いたしますので、多数の皆様のご参加をいただきたく、ご案内申し上げます。

人文学部同窓会長 米原 寛

日時 平成27年7月11日(土) 午後1時30分
場所 ボルファートとやま
(富山市奥田新町81 TEL 076-431-1113)

講演 講師 人文学部准教授 大西 宏 治
演題 若者にとっての富山の「まち」
- 中心市街地の時代変化 -

講演要旨

まちはその時々々の経済・社会に影響され様々に変化します。この変化に呼応するように、若者がもつまちへのイメージも変化します。かつての若者は中心商業地・まちなかを通じて自分たちの未来の生活を想像したと思います。しかし、今の若者の多くはまちなかに魅力も未来も感じません。この変化を生み出したものは何なののでしょうか。富山市の中心商店街の変容を事例に若者が持つまちに対するイメージの時代変化を説明したいと思います。また総曲輪通りに設置された「富山まちなか研究室 MAG. net」などの新たなまちの価値の創造についても議論します。

懇親会：午後4時 会 費：5,000円(当日受付でお納め下さい)

お知らせ

第四回人文の集い

講演：『感情』とは何だろうか？

— 心理学的な視点から —

講師：富山大学名誉教授

海老原直邦

期日：十一月七日(土)

午前10時～11時30分

会場：富山大学人文学部一階

第二講義室

講演要旨

喜びや悲しみ、不安や怒り、快不快、好き嫌い、愛と憎しみ、寂しさや空しさ、などなど、様々な感情が良くも悪くも私たちの精神生活に豊かな彩りを添えています。感情はそれぞれ特有の心的体験をもたらし、激しくあるいは穏やかに行動への準備状態をつくり出します。

心理学の成果にも言及しつつ、「感情」の正体に迫ってみます。

終了後、十一時五十分よりキヤンパス内の「アザミ」にて昼食会を予定しています。講演は参加費無料、昼食会は会費二千円、どちらか一方だけの参加も可能です。

同封のチラシをご覧の上、同封ハガキでお申し込み下さい。

総会時期の変更について

平成二十七年総会

七月十一日(土)に開催します

当会の総会はこれまで十一月前半の土曜日に開催していましたが、昨年平成二十六年度総会で、総会の開催時期を早めることを決定しました。

十一月開催では年度終了後、半年近く経過してからの総会であり、旧年度事業報告・決算報告や新年度事業計画・予算案の審議についてタイミングが悪く、富山大学同窓会連合会への行事予定報告など様々な面で不都合が生じていましたので、これを改めるための変更です。

なお、今後の同窓会事業は次の通り予定しています。

◎平成二十七年総会

七月十一日(土)

◎第四回人文の集い

十一月七日(土)

上記案内の通りです。

◎平成二十七年卒業祝賀会

平成二十八年三月下旬

総会は同封ハガキでお申し込みください。

総会、人文の集いには多数のご参加をお待ちしています。

人文学部教員異動

退職

(平成27年3月)

○鈴木孝志(イギリス言語)

○高安和子(アメリカ言語)

○山口幸祐(東アジア言語)

○湯川純幸(言語学)

○金子幸代(比較文化)

着任 (平成27年4月)

○福家泰洋(国際文化論 准教授)

○小谷瑛輔(日本文学) 准教授

○結城史郎(イギリス言語) 准教授

一 報

謹んでご冥福をお祈り致します

浦島 郁子(国文2) (旧姓金岡)

直山 純一(国文7)

上田 正二(英文3)

平成25年7月13日(旧姓米田)

渡辺 洋 (比較文学名誉教授)

平成26年6月4日

福田 芙美(心理49)

平成26年8月12日(旧姓穴川)

年会費の報告

本年度の年会費納入状況をお知らせします。平成26年10月1日～27年4月16日迄、305名(終身会費13名、年会費292名)の方々から422,000円の年会費を納入していただきました。ご支援、ご協力を厚く御礼申し上げます。

編集委員

田中 史子 谷口 恵子
成瀬裕美子 山藤 登
山本 孝一 畠山 節子